

ずいそう

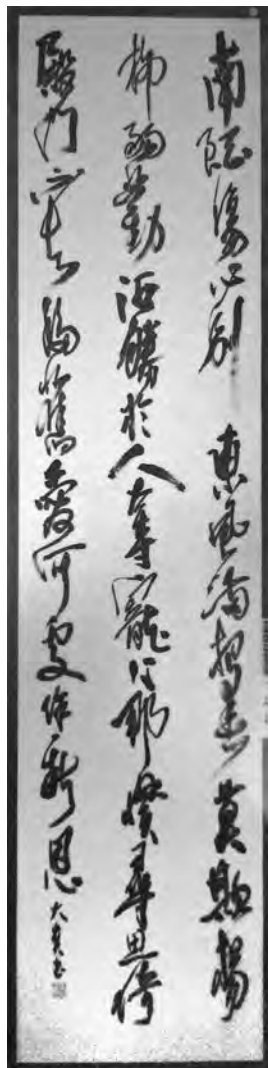
書道の魅力

井内大貴



今回原稿依頼を頂いたのは、社内の新人発表の自己紹介で書道の経験を紹介させて頂いたところ、広報部の方に目にとめて頂き、お話を頂いたのが切掛けでした。なかなか無い機会のためぜひと思い、拙筆ながら筆を執らせて頂きます。

簡単に自己紹介をさせて頂きますと、平成4年に兵庫県姫路市に生まれ、書道を始めたのは小学2年生の時です。玄耀書道会と言う兵庫県発祥の会派の教室で、大学進学で県外に出るまでの11年ほど書道を習って来ました。僭越ながら全国レベルの賞も何度か頂いた経験がございます。そんな私の昔を振り返ると共に、書道の魅力についてご紹介できればと思います。



まず、私の通った書道教室について紹介させていただきます。書道教室と聞くと優しい先生や友達とわいわい楽しくするイメージの方も多いとは思いますが、少なくとも私の通った教室は違いました。時間帯にもよりますが大人の割合も多く、友達とおしゃべりをするのが激が飛び、ふざけたことをしていると、比喩ではなく文字通り、文鎮が飛んでくるようなところでした。私が初めて親に連れられ門を叩いたときも、2~3学年上であろう女の子がげん骨をされて泣いており、なんて所に入れられたのだと衝撃を受けたのを鮮明に覚えています。平成生まれのゆとり教育で育った世代には珍しいタイプの教室だったと思います。

そんな教室のボスは“井上先生”と言う当時60歳前後の女性の先生でした。白銀の短髪で若々しくとても格好の良い先生でした。前述のとおり厳しい一面もありましたが、それ以上に面倒見がよく、不登校のような不良も不思議と教室には通っておりました。私も文鎮を投げられたのは一度きりで、4年生くらいの時でしょうか、紙に落書きをしていたところ文鎮が飛んできて、紙を無駄にするなアホ！その紙一枚のために木が一本死ぬんや！とすごい剣幕で怒られたのを覚えています。当時としては恐怖でしか無かったため、それからは紙一枚一枚に真摯に取り組み、失敗しないようにする。失敗した紙の空いた部分にも、失敗した箇所を真っ黒になるまで練習し、そして最後は筆や硯の墨とりに使うようになりました。後から思い返せば、まず頭で成功の形をより具体的にイメージする、最初に渡される練習用紙で人より多く練習ができる、など上達に繋がる行いだったのだろうと思います。そしてなにより、当たり前にあるものにも際限があり、ものを大切にする。という人としての姿勢も学びました。私自身のものに対するはらいを、止めに正して下さったのでしょうか。あの時に怒られてよかったとおもっております。

このようにして指導頂いたおかげで、私の書道の技術はメキメキと上達し、小学校高学年の時点で大人の段位クラスに昇格しておりました。会派内の雑誌でも月の優良作品として度々掲載され、井上先生や先生に師事するアシスタントの方々からも認めてもらったの

が嬉しかったのを覚えています。冒頭で紹介したような賞も頂くことができ、書道がどんどん好きになりました。最終的には大学進学で地方に出るために辞めてしまったのが心残りですが、それからこの書道の経験を生かして、大学祭の看板を書かせて貰ったり、社会人でも冠婚葬祭などでの一筆もなるべく筆を執るようしております。

私が思う書道の魅力として、やはりタイピングにはない味や思いを入れることが出来ることにあると思います。筆跡鑑定があるように、同じ文字を書いても千差万別です。だらしない人はやはり止めはねがルーズになりがちですし、自信がある人は余白目いっぱい使って大きく書きます。心情的な所でいえば怒っていれば自然と荒くなりますし、悲しい時は小さくなります。手書きの文字には書き手の性格や心情が無意識に現れるのです。そこで例えば、祝儀のたった一つの名前をとっても普段ルーズな友人が、しっかり止めはねをして書いてくれたら、別に教科書通りに綺麗な字でなくとも、改まってお祝いをしてくれてるんだなと感じませんか。書道では色んな書体や、過去の偉人の書を真似て練習します。主に漢詩が多いですが、よく先

生からも意味を知って書いているのかと問われていました。意味を知って書くことで細部の書き方、表現も変わってきます。ああこまでは勢いで墨継ぎ無しだな、ここの擦れはこういう気持ちだったんだな、と言うように。このような練習を通して字に込めることのできる気持ちの幅が広がって行くのです。私は書道は必ずしも綺麗な字である必要はないと思います。もちろんベースとして綺麗に書くこともできるように練習しますが、その止めはねの選択でどれだけ気持ちを表現できるか、読み取れるかが重要だと考えています。

電子化が進み手書きをする機会は少なくなりました。さらにリモート業務の推進もあり私もここ一年は特に字を書く機会が少なかったように思います。しかしこんな時だからこそ字を書くということに向き合ってみるのもいかがでしょうか。簡単なメモ書きでも構いません。ご家族ご友人の字を見て、性格や気持ちを想像してみたり、書き手側になって、心情を意識して書いてみるのもいいと思います。少しばかり、人の温かみを感じることが出来るのではないのでしょうか。書道の面白さも感じて頂けると思います。

— いうち だいき コベルコ建機㈱ 技術開発本部 —

